

平成30年7月19日（木曜日）

生涯教育の先駆者

廣池千九郎の業績

— 著作に込めた思い —

③『史学普及雑誌』

行について見ていきます。

歴史学を一般の人にも

廣池千九郎は、『中津歴史』執筆を機に歴史家を志し、明治25年に拠点を京都へ移しました。上京して福沢諭吉先生を頼るようにとアドバイスをしてくれる人もいました。しかし、「桓武天皇以来の日本の旧都で、あらゆる歴史の材料がここにある」という理由で京都を選びます。

本当は京都帝国大学にでも進み、研究者としての道を歩みたかったでしょうが、学歴も経済力もない廣池は、『史学普及雑誌』という月刊の歴史雑誌を出版することで、研究・発表の場と生活の糧を得ることにしました。

当時は歴史ブームで様々な歴史雑誌が刊行されていましたが、専門

的なものか、通俗的なものがほとんどでした。そこで教育者である廣池は、歴史学を一般の人々にも普及させようという意図で編集を行いました。

本誌には重野安繹（東京帝国大学教授）、井上頼国（国学院講師、宮内省御用掛）、久米幹文（第一高等中学校教授・国学院講師）、栗田寛（東京帝国大学教授）、細川潤次郎（枢密顧問官、洋学者）など、当時の著名な歴史家や国学者が寄稿しています。内容は史論、客説、史談、雑録、その他詠詩、雑報などからなっていて、客説以外のほとんどの記事を廣池が書いています。

苦難の中で学ぶ

1、2号は売れましたが、それ以降は日清戦争の勃発などで、購買数が減少し、経営がどんどん悪化します。印刷所を2度変更して経費削減

減を図り、広告を多数掲載し、収入を得るなど様々な工夫を行いました。

内容面でも印刷を鮮明にし、絵図や挿絵などを増やしたり、維新史などを取り上げて、面白みのある記事を掲載。号を重ねるごとに、内容や構成、デザインを刷新しました。しかし、時流には勝てず、売り上げはさらに減少していきます。

廣池はこの当時に「風呂へも入らなかつた。時々水をあびてすませてきた。ナマ魚は、一年に一回も食べたことはない。ヒモノも食べたことはない。飯と汁だけでやってきた。しかし、それにも屈せず勉強し、歴史や法律を独学をもって研究し、また英語もドイツ語も習ってきた」と回顧しています。

このように京都時代は苦学の日々であり、『史学普及雑誌』は経営的には失敗でしたが、その後の飛躍の基盤となるものでした。

（公益財団法人モラロジー研究所廣池千九郎記念館学芸員・矢野篤）



『史学普及雑誌』全27号（明治25～28年）。綿密な計画のもとに始めたが様々な苦勞も

度変更して経費削減